

## カール・ポラニーとハイマン・ミンスキーそしてトマ・ピケティ

ハイマン・ミンスキーもポラニーと同じように生前は社会から無視されていた経済学者である。しかし相次ぐ金融危機の中で注目されるようになり、現在は定期的にくミンスキー学会が開かれ、国際的な金融危機研究の場になっている。ミンスキーは1911年生まれのユダヤ系アメリカ人で、長らくセントルイスのワシントン大学の教授を務めた。ミンスキーは頻発する経済危機の特徴を分析し、理論化したことで知られている。金融市場における通常のライフサイクルには、泡沫的投機バブルによる脆さが内在するとする「金融不安定性の理論」である。この理論は2008年のリーマンショックで改めて見直された。金融危機は10段階を辿って反復するというもので「ミンスキー・サークル」と呼ばれている。

- ① 調子のいい時、投資家はリスクを取る。
- ② どんどんリスクを取る。
- ③ リスクに見合ったリターンがとれなくなる水準まで、リスクを取る。
- ④ 何かのショックでリスクが拡大する。
- ⑤ 慌てた投資家が資産を売却する。
- ⑥ 資産価値が暴落する。
- ⑦ 投資家が債務超過に陥り、破産する。
- ⑧ 投資家に融資していた銀行が破綻する。
- ⑨ 中央銀行が銀行を救済する。
- ⑩ ①に戻る。

この内、信用供与で膨らみきって資産が暴落する⑥が「ミンスキー・ポイント」と呼ばれ、バブル崩壊のシグナルになる。重要なのは、①から始まって⑩になるとまた①に戻るという繰り返しである。ポラニーとミンスキーは年齢が離れていて直接の接点はない。資本主義の矛盾をポラニーが「市場経済」「経済社会」を通して明らかにしたのに対して、ミンスキーは「金融」の分析でバブルから金融危機に至る道筋を示した。ポラニーは市場経済のなかで増大する「格差」の問題に気づき、ミンスキーは当時勢いを増しつつあった新自由主義経済に警告を発していた。現在アメリカにおける格差の拡大が空前のものになり、日本でも憂慮される状態になっている。こうした折、フランスの経済学者トマ・ピケティが『21世紀の資本』を著して、20カ国の3世紀にわたる税務調査資料の分析から「格差」が増大する道筋を明らかにした。この本の英語版と日本語版が特に売れているのは、両国で格差が著しく拡大し、社会問題になっていることの証左である。ピケティの特集を出した『週刊東洋経済』は、ピケティと「リーマンショック後に再評価されたハイマン・ミンスキーとの接点」を取り上げている。2人の間には「資本主義は大きな問題として（金融危機と分配の格差）を内包しており、市場メカニズムだけで解決することはできないという共通性がある。ミンスキーの研究の中心にあるのは「負債」の問題であり、ピケティの資本収益率の分析について理論面で両者は接点をもつ可能性がある」と指摘している。